=市史編さん便り=　【41 号】 令和 3 年 10 月 13 日（水）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

「第 49 回高知県図書館大会」で 新『土佐清水市史』編さん事業を紹介！

今月 11 日（月）12:50 よりオーテピア 4 階ホールで「第 49 回高知県図書館大会」が開催された。今回は実践報告とパネルディスカッションの講師を大会事務局から依頼され、出席させていただいた。高知城歴史博物館史料保存修理室長・田井東浩平氏の基調講演、話題提供として私の他に NPO 法人地域文化計画理事・中村茂生氏、高知地域資料保存ネットワーク・楠瀬慶太氏（高知新聞記者）が登壇した。土佐清水市からは、岩井拓史中央公民館長、池直美市民図書館長補佐が出席した。

会場には、旧大津小学校史資料整理でお世話になった高知城歴史博物館・渡部館長と自由民権記念館・筒井館長、中世石造物調査でお世話になったいの史談会山岡会長が出席されており、お声かけや激励をいただいた。

実践報告のテーマは、まさに「市史編さんを通じた郷土史の普及啓発」。全県の図書館関係者に土佐清水市がおこなっている市史編さん事業の全容を力の限り PR させていただいた。発表時間が短く、もっと聞きたかったというお声もいただき、うれしく思う。『市町村史』の編さんは、近年、県内の市町村でも多くおこなわれてきている。現在、各市町村が初版を発刊してから 30～50 年を経ており、改訂の時期になっている。大切な税金を使って発刊される『市町村史』ではあるが、中には委託業者に丸投げのケースが多く見られる。資料を集め、業者に書いてもらうパターンである。これは従来市町村にいた郷土史家といわれる在野の地域史研究者が減少し、郷土史にこだわり、関心を持つ人が少なくなってきたためと思われる。

新『土佐清水市史』は、市内や県内のその道の研究者に直接執筆を依頼して編さん作業を実施している。手作りの『市史』をいわばチームで編さんしているといえる。無味乾燥とした『市史』ではなく、血の通った市民のための熱い『市史』を編さんしていきたいと編集委員会一同が願っている。以下、実践報告の概要を記す。

（１）市史編さん事業は、単なる『市町村史』の編さん・刊行ではない。

①写真資料のデジタルアーカイブ等の資料整理を推進。約1300の写真を集積。
②山城調査で最新の縄張図を作成。市域の山城の特色や価値付けを記述。
③中浜小学校に民具や埋蔵文化財を集積、学校への貸出や見学。
④戦争遺跡の図面化。記録保存。
（震洋特攻艇格納壕、足摺探信所跡）
⑤学校史資料（「学校日誌」「アルバム」等）の中浜小学校への保存。
⑥普及啓発活動
小中高への出前社会科授業、市民への歴史講座、遍路道 walk、図書館への展示。
⑦大正末～昭和初期におこなわれた台湾南方澳への松尾・中浜等からの漁業移民の歴史を高知大学特任教授・吉尾寛先生に執筆いただく。
このことが縁となり、台湾宜蘭県立博物館主催の「南方澳漁港 100 周年国際シンポジウム」にて土佐清水市泥谷市長が、宇和島市長とともに祝辞を述べた（web にての開幕式）。アフターコロナを見据えて、国際交流の期待も高まる。
⑧日本ジオパークに認定された。市史編さん事業もジオパークに全面協力。

（２）万次郎の先輩・池道之助のこと。道之助を知る図書館関係者は少なかった。
（もっともっと道之助を普及啓発しないといけないと思った。）

・地震や津波について研究しており、池家墓所に宝永地震と安政南海地震のことを銘文に刻み、『大変記』という文書を残している。
・東日本大震災ではスマホ、ビデオの普及でこれまで不明であった津波の実態が明らかになった。これまでは伝聞、言葉による口伝でしかその実態を伝えることができなかった（言葉を介して子・孫、子孫へと継承していく）。
・地震や津波を後世の人々にどう伝えていくか道之助は心を砕いた。「大切な命を自ら守れ！」そう道之助が私たちに必死に叫んでいるように思える。
・震災の核心に触れた道之助の言葉。当時は理解する人もない、「のど元過ぎれば熱さ忘れる」の譬えの如く、忘れ去られる暗闇の中で道之助は一人戦い続けた。自分の言葉が、一条の光明となることを信じて。私たちへ、さらにその先の未来の人々に向かって。

【編集後記】最近、運動不足が気になり、土日にウォーキングを始めた。自動車で通勤しているので、風や陽光・湿度等、自然を感じる力が弱くなっていると実感。歩いていると天気が下ってきていることや、海上のうねり具合から台風が南方上にいること等がよく分かる。自然が私たちに語りかけてくれているのだと思う。歴史も同じだと思う。まず語りかけてくれる事象を感じ取る力が必要だとつくづくと思う今日この頃である。（田村）